

資料3 **2013 年度後期学校ボランティア活動レポート集**

目 次

土屋小学校

1. 先生方の授業の工夫を見て学んだこと	小林 将人	250
2. 授業で何を教えるのか	若林 隆	251
3. 自ら考える力	伊藤 大祐	251
4. 児童から学ぶ	栗林 安幸	252
5. イメージを膨らませる一言	蓼沼 礼敬	253
6. 見守ることって難しい	矢部 丈登	254
7. 児童の為に	嘉瀬 剛史	255
8. 陰での準備	田山 政志	256
9. 遠くが見えるようになって	豊原 太雅	257
10. 見えない工夫	中島 亜耶	258
11. 自らの経験を活かして	川尻 みほ	259
12. 裏方の視点	森本 耕平	260
13. 考え方の育て方	須鎌 雅士	261

土沢中学校

14. 愛のある教え方を模索する 水戸 紘子 262
15. 環境に応じた指導 稲葉 沙樹 263
16. 生徒へ教えることの配慮 岡田 一樹 264
17. リズミカルな授業の中で見つけた細かい工夫 佐々木一樹 264
18. 教えるだけが教師じゃない 芹澤 郁之 265
19. 生徒の現状, 教師の課題 高橋 雄亮 266
20. 生徒たちの学習意欲とその実態 三澤 達也 267
21. ボランティアで気づけたこと 山田 奈織 268
22. ベテランだからこそ分かる事 湯地 弘季 269
23. 自己の問題点の発見 福本 健志 270
24. 生徒に合わせた授業展開をする難しさ 石川 航大 271
25. 無限大の可能性を持った生徒 高島 葵 272

秦野曾屋高等学校

26. 山積みの課題と可能性 丸山彩恵子 273

羽沢小学校・明治小学校

27. 子どもたちの魅力・授業の工夫 佐藤 彩香 274

土屋小学校・土沢中学校

28. 教師の立場から見た学校 須田 遼 275

土沢中学校・秦野曾屋高等学校

29. 確かな「理解と伝え方」 小椋 光 276

30. まるかいてちゃん, まるかいてちゃん。
～絵描き歌を使用した読解力トレーニング～ 西田 紘章 277

土屋小学校・土沢中学校・秦野曾屋高等学校

31. 大学生ボランティアとしての立場 栗原 史帆 279

土屋小学校

1. 先生方の授業の工夫を見て 学んだこと

生物科学科 科目等履修生 小林 将人

私は10月から12月の間、毎週月・火・水曜日の週3日間、土屋小学校の学校ボランティアに参加しました。そして、実際に授業を見学したり、プリントの丸付けなどの手伝いをしたりしました。

授業では、児童が内容を分かりやすくするためや授業を円滑に進めるために先生方が様々な工夫をしていることが分かりました。その工夫を見て教科ごとの指導のポイントを学ぶことが出来ました。そのなかから、特に印象に残ったことを4つほどまとめたいと思います。

一つ目は、3年生の算数の授業のときです。教えている範囲はちょうど分数のところ、ここでつまずくと後々の算数や数学が苦手になってしまうところです。この範囲を教えるとき、先生はテープを使って分数の概念を説明していました。このとき、基準(1)となるテープを黒板に張り、そのテープを2等分したうちの1の長さのテープ、3等分したうちの1の長さのテープ、同様に4等分・5等分したうちの1の長さのテープを黒板に並べて張っていました。そして、テープを多く等分する度に1の長さのテープが短くなっていくのを視覚的に理解させ、分母が大きくなっていけば値がどんどん小さくなることを説明していました。この工夫を見たとき、算数の概念を説明する際には視覚的にわかるような工夫をすることが理解の手助けになることを学びました。

二つ目は、5年生の理科の授業のときです。「溶ける」というのはどういうことを教えるために、水と塩を使って実験していました。ま

ず、水と塩の質量をそれぞれ計測してその値をメモし、次にその水に塩を溶かして、再度質量を計測するという手順を踏んでいました。塩が水に溶けると目には見えなくなるので、塩はなくなったように見えるが、実際に質量を測ると水と塩が合わさった質量になっていることから、確かに塩は水の中にあることを理解させていました。理科の学習では、実際に実験をして教える方が児童にとっては理解しやすく、より強く記憶にも残るという利点があることを改めて実感しました。

三つ目は、6年生の家庭科の授業のときです。その日は、次の調理実習の計画を立てる授業をしていましたが、その際、先生は児童にプリントを配付していました。そのプリントには調理実習のめあて・身支度・材料を記入する欄や、進行予定欄、盛り付け予想図、評価・感想・反省を書く欄がありました。私が小学生だった頃もこのような進行予定表を作ったことを思い出しました。児童が計画を立てているところを見ると、実際に作業を始める前に予め進行を計画しておくことが実習の授業の前には必要であり、大切なことだと改めて感じました。

四つ目は、特別支援学級を見学したときのことです。見学したときは算数の範囲で、直角や平行の線、平行四辺形の書き方を教えていました。このとき、先生はまず児童にパソコンの画面を見せ、画像で手順を見せた後にノートにその手順通りに書かせるやり方をしていました。やはり、言葉で伝えるよりも視覚的に伝えたほうが理解しやすいということが分かりました。また、問題文を読むときも、ゆっくり、問題文を指でなぞりながら読んでいました。そのような児童への配慮が特別支援学級では特に大切であるということを学びました。

先生方は児童が理解しやすいよう、また、授業が円滑に進むように様々な工夫を凝らしていることを学校ボランティアの活動を通して知ることができ、とても貴重な経験になりました。また、その工夫にもプリントやパソコン、実験

など、教科ごとにツールのバリエーションがあることを、実際に見ることで改めて知りました。この経験を基に、将来教師になった時に自分自身でも様々な工夫を凝らせるようになりたいと思います。

2. 授業で何を教えるのか

生物科学科 科目等履修生 若林 隆

私は土屋小学校のボランティア活動で初任の若い先生からベテランの教頭先生まで様々な先生の授業の補助に入りました。入った授業は国語や算数、理科など様々な教科に渡り、研究授業なども見学させて頂きました。

どの授業でも共通して児童自身に思考させ表現させる場面が十分に用意されていました。そして、授業では児童たちが主体的に授業に参加し、活発に発表していました。私はこれらの授業を見て中学、高校でも生徒自身に思考や表現をさせることの大切さを強く感じ、授業は知識を与えることが全てではないと実感しました。

「学校の勉強は社会に出ても役に立たない」とか「知識を学習するのならば塾でも十分」というような意見に対して、私はいままで明確な反論を持っていませんでした。集団行動を学ぶといったことなどが学校の必要性としてすぐに思い浮かびますが、それだけでは教科指導の必要性があまり感じられません。しかし、私は土屋小学校の授業で積極的に児童が試行錯誤し、発言をするのを見て、きっと習った知識よりもいろいろと思考したことや表現しようとしたことこそ一番の糧になるのだなと思い至りました。私は理科の教員を目指していますが、教科の内容を通して思考すること、考えを表現することを訓練することが最も私が授業で教えるべきことであると思いました。

生徒自身の思考や表現というのは、教職の授業でもよく出てくるキーワードでしっかり勉強

している人ならばとても今更なことだと思います。しかし、恥ずかしながら私はこのことに関して知っていてもあまり意識を向けていませんでした。今回のボランティアで、例えば5年生の算数の授業では、平行四辺形の面積を学習しましたが、これは知識としては底辺×高さという公式一つだけの話ですが、平行四辺形を実際に方眼紙に書かせて、切り取って変形させてみて既に習った公式で求められるような形にしていろいろな方法で面積を求めさせ、それを発表させていました。これ自体はなんてことのない授業の一場面ですが、これまでの自分だったら平行四辺形の面積を教える際に公式やそうなる理由を教えることに終始して、実際に自分で考えさせるということにはあまり思い至らなかったと思います。

私が目指しているのは中学校、高校の教員なので小学校とは事情が異なる部分もたくさんあると思いますが、知識自体を覚えておく必要性は内容が基本的な分小学校のほうが大きく、思考や表現の訓練の必要性は中学、高校のほうがより大きいだろうと思います。理科は中高になるに連れて内容が難しくなる一方で、生活における実用性や実感は少なくなっていくことから、学校を卒業した後に必要のない人、興味のない人は全て忘れてしまってもおかしくないと思います。しかし、理科の知識自体は忘れてしまっても、その過程で培った思考力や表現力はきっと社会に出ても役に立つと思います。この先、思考力や表現力を身につけさせる授業を展開できるように努力していきたいと思っています。

3. 自ら考える力

情報科学科 4年 伊藤 大祐

私は10, 11月の毎週火曜日の午後に土屋小学校でボランティア活動をしました。一日の流れは、主に1, 2年生の児童を中心として一緒に

給食を食べ、昼休みは一緒に遊びました。その後の5,6時間目は、授業や校務作業の手伝いや見学をしました。今回はクラブ活動や社会、算数、音楽の授業に参加しました。また、校務作業としては草刈りや書き初めて使用する掛け軸などを作る手伝いをしました。

私がこの学校ボランティアで感じたことは、どの場面においても自ら考えて行動できるように先生が指導していることでした。今回は学校ボランティアをした回数が少なかったため、すべての学年を見学することはできませんでした。が、児童が自ら考えて行動していないと、ほとんどの場面で先生が指導していました。

1年生は授業を見学することはなく、給食と一緒に食べるだけでしたが、それだけでも感じることができました。給食を食べ終わったら、火曜日は掃除がないのでクリーン系の児童がゴミ拾いの指示をします。黒板を拭いている児童がいると、そこに集まってきたりしてしまいます。そのときには先生が「こんなにいるの？」などと児童に問いかけをしていました。それを聞いた児童は、自ら考えてそれをやめて他の作業をすることがあります。このようにちょっとした一言で児童に考えさせることができるということを感じました。

また、私が児童のクラブ活動に参加したときにも、児童たちが自ら考えることが必要であると感じました。その日のクラブ活動では、始めにタグラグビーをしました。その後、もう1つくらい違う競技をしたいので、それを児童自身で決めるために、集まっていました。クラブの部長が中心になって話し合っているのですが、ふざけていたりしたため、なかなか決まりませんでした。クラブが終わった後、先生とお話をしました。そのときに先生は、「クラブは自主的な活動だからあまり口を挟まないようにしているし、みんなが部長に協力し、部長も流されないようにしてほしい。」とおっしゃっていました。また、「このようにならないためには、一人ひとりが何をしたら良いのか考えることが

大事なんだよ」ともおっしゃっていました。やはりどの場面においても自ら考える力は必要であり、先生はどうしたら良いのか考えているのだと感じました。

前期も土屋小学校でボランティアをして、そのときも給食は主に1年生と一緒に食べていました。その頃は、先生が「日直さん、給食終わりの時間ですよ」と言って、それに気づいた日直の児童があいさつをするような感じでした。しかし、今では児童の誰かが「日直さん、時間だよ」というような声を掛け、あいさつをしていたり、日直の児童が自分で気づいてあいさつをするようになっていました。また、あいさつをする際も前期の頃はみんなが話していたりして先生がやり直しをさせていたこともありましたが、今ではほとんどやり直しをすることなくあいさつができるようになっていました。さらに、ゴミ拾いをするときも以前はほうきを取りにみんなが集まってしまっていたのですが、今ではクリーン系の児童が出席番号で役割分担をしているため、集まってしまうことが少なくなりました。

このように前期から比べて、児童が自分で考えて行動できるようになってすごく成長したな、と感じました。先生が児童に一言声をかけてあげるだけでもこれだけ変わるといことが実感できました。私が教師という立場になったときには、このような成長につながる一言の声かけができるようになりたいと思います。

4. 児童から学ぶ

化学科 4年 栗林 安幸

土屋小学校へ9:30から13:10まで学習支援ボランティアに参加した。学習支援ボランティア活動の具体的な内容として、授業の補助と校務作業の手伝いを主に行った。校務作業の手伝いでは、校内の不要になったものを運ぶ作業や

腐葉土作り、行事の会場づくりなどを行った。また、今回、授業の補助として各学年の算数、6学年の図工の授業の補助として参加した。図工では、図書館、パソコン室などで児童の様子を見ていた。算数の授業では、採点や困っている児童へのアドバイスを行った。給食は主に1年生の児童たちと一緒に食べ、片づけ、掃除の手伝いを行った。今回は、教育実習等で、ボランティアに行ける日が前年よりも少なくなってしまった。ただ、その中でもいろんな児童と交流することができた。

授業に参加することで、どのように指導をしていくのか間近で見ることができ身につけることができたと感じている。

4年生の算数の授業の補助をしていると、割り算の筆算で、多くの児童が小数点を付け忘れていたことが多く、つまり部分が見えた。また、計算の方法など自分の考えを表現し、わかりやすく相手に伝えるという場面を先生が用意し、児童の考えなどを引き出すような授業がみられた。授業は、ただ教師が一方向的に教え込むのではなく、児童が興味をもって参加し、主体となるような授業を作ることが必要であると学ぶことができた。また、クラスみんなの考えを引き出し共有することで、解き方や考え方のバリエーションを増やすことができ、思考力を養うことにつながると思う。算数科の授業だけに限らず、様々な授業でこのような、表現力や思考力を養う授業が大切だと学ぶことができた。

11月の長野県の母校での小学校実習では、ボランティアで日ごろから土屋小の児童と関わっていたので、自然に実習校の児童と接することができ、教壇実習でも堂々と授業をすることができた。この実習を通して、児童の「行為と意思」というご指導を頂いた。児童が授業や休み時間などでみられる行動の事実から児童がこう考えているという考察を立て、それを積み重ねていくことでその児童のことをより理解できる。また、「こうしたら、こうなった」と自

ら児童に働きかけ、反応を分析し、児童の特徴を見出すことができる。実習後のボランティアでは、そのことについて、意識しながら授業の補助や児童と接するようにした。このことは、将来教師となったときも必要となってくる。児童を見る目を少しでも養うことができた実感している。

また、今回のボランティアでは、校務作業の手伝いも多く経験することができ、学校は、教師だけでなく校務さんや事務員さんも重要な役割を持っていると感じた。お互いに助け合いながら児童のために学校運営をしていくことが大切だと感じた。

今まで、授業で児童に対する教師の発問や働きかけ、授業の展開方法を見て学ぼうと考えていた。しかし、児童の場面ごとの行動を観てどんなことを思っているのか考え、「児童一人ひとりの姿から学ぶ姿勢」を大切にしていきたいと思う。

最後に、去年から続けたボランティア活動は、私にとって充実した日々であり、教職への思いをさらに強くする機会となった。ここで、得た経験は、実際に教員として教壇に立つ際に、必ず役に立つ経験であり、この経験を生かせるように、より一層努力していきたいと思う。2年間お世話になりました。どうもありがとうございました。

5. イメージを膨らませる一言

化学科 4年 蓼沼 礼敬

私は10月から12月にかけて、土屋小学校で学校ボランティア活動をしました。授業の補助としていくつかの授業に参加しましたが、理科だけでなく、音楽や図工、体育、総合的な学習の時間と様々な教科の授業に参加しました。理科や算数の授業には以前活動した際にも参加したことがありましたが、今回は実技教科にも多

く参加できたので、より生き生きとした児童たちの姿を見ることができました。特にクラブ活動で理科クラブに参加した際には、とても元気な児童たちの様子を見ることができ、かつ彼らと一緒に実験を楽しむこともできました。また、校務作業にも度々参加しました。植木の刈り込み作業や創立140周年の記念式典に使われるタイル制作の補助のような学校全体にかかわる作業はもちろん、焼き芋作りのための木材の準備や、来年1月に児童たちが書く書き初めを飾る掛け軸作りの手伝いなど、児童たちに直接関係する作業にも参加しました。

今回の活動では、授業面では全体を通して上級生とかかわる場面が多かった気がします。市の音楽祭に向けて合唱練習に取り組む4、5年生はとても一生懸命で、活動に行くと聴く度にどんどん上手くなっていました。また、6年生全員で取り組んでいた合奏も、パートごとにまとまって練習したり、分からない部分はお互いに教え合ったりしていて、学級全体がまとまっていることが見て取れました。

そんな6年生の体育の授業に参加した時のことです。その日は持久走大会を近くに控えていたのでその練習をして、その後は体育館でマット運動を行いました。前転や後転から始まり、順番に開脚前転、倒立前転、…と進むうちに、やがて飛び込み前転に差し掛かりました。私は、飛び込み前転は普通の前転に助走を加えたようなものと捉えていたので、倒立前転あたりと比べればそこまで難しくないし、みんなぎつとできるだろうと考えていました。しかし実際に児童たちにやらせてみると、思ったようにできない児童が大多数で、普通の前転のようになってしまう子の姿が多く見られました。その様子を見ていた先生は、彼らに向けて「手をつくより先に足が(地面から)離れないといけないんだよ」とアドバイスをしました。するとそのアドバイスを聞いた後の児童たちは、見違えるくらいきれいな飛び込み前転ができるようになっていました。たった一言で児童たちの動きを大

きく変えてしまった先生ですが、とりわけ凄いことを言っているわけではありません。それでも彼らの動きがあんなにはっきりと変わったのは、きっとその一言が非常に分かりやすく、イメージしやすかったためだろうと思います。同じ「何かを教える方法」でも、順を追って一から説明するより、要点を押えた、簡潔かつイメージしやすい一言の方が、分かりやすくより効果が出るものもあるのだと思いました。もちろん先生がアドバイスをしたからといって、クラスの全員が出来るようになったわけではありません。しかし、誰かが失敗したことについて、それを責める児童がああ学級には一人もいなくて、授業中は終始明るい雰囲気だったので、一緒にいた私たちもずっと笑顔で児童たちと接することができました。

今回の場合は実技教科だったので、実際に見せて伝えることもできたと思います。しかし、実際に私がこれから教える理科では、実験や観察をして、あるいはさせて、見せたり触らせたりできるものには限度があります。そんな時にこそ、今回のように生徒のイメージを膨らませることのできる言葉をかけてあげて、私が教えるようとしていることの楽しさや面白さを伝えていきたいと思います。私の一言を通して生徒の興味を引き出していけるように日頃から工夫を凝らしていきたいと思います。

6. 見守ることって難しい

化学科 3年 矢部 丈登

私は小学校ボランティアで土屋小学校に行きました。活動内容として、児童と一緒に給食の時間や昼休みを一緒に過ごしたり、校務の方と校務作業をしたり、授業を見学しました。

今回の学校ボランティアの体験を通じて、見守ることが難しいということを実感しました。今回感じたことは以下の3点です。

1つ目は、児童自身の活動を促すことの難しさを実感したことです。給食や掃除のとき、特に低学年の児童に多くあったのですが、児童がぎこちなくやっている作業をじっくり手助けしてしまいそうになる場面が多くありました。僕たちならほんの一瞬で出来てしまうことなのですが、でも、もしやってしまったら、児童の成長を促すことが出来ないなと思いました。担任の先生も、僕たちがやってしまわないようにとおっしゃっていましたし、最後まで児童自身にやらせようという姿勢が見えていました。ここで、やってあげたくなる気持ちをぐっと堪え、見守ることを決めました。

また、見守るときに、児童の危険についても常に注意していないといけないと思いました。昼休みに児童と校庭や教室で遊んでいるときに、「危ないっ！」と思う時がありました。今まで僕の目の前で怪我をした児童はいませんが、ちょっとした行動が怪我に繋がると思うと、危険についていつも意識していないといけないなと思いました。また、校務さんが児童の安全を第一に考えて作業をしていたのも印象的でした。主に、植木の枝で児童が怪我をしないようにと児童の目の高さの枝を切っておく工夫、道具の扱い、危険な作業の時間帯も児童がいない時間を選ぶなどの工夫がありました。児童の成長のために見守ることは大事ですが、見守ることって簡単なようで難しいと思いました。

2つ目として、児童自身の活動を促して見守るためには、注意するときや助言するときなどは、児童に伝わるようにしなければならぬということです。授業中、先生の話を見聞かずにふざけている児童がいて、注意したことがありました。授業中なので静かに、短く注意をする必要があったのですが、なかなか聞いてくれず、改善もされませんでした。また、りんどう祭でも、ルールの説明をしているとき、なかなか聞いてくれず、試行錯誤しながら説明や注意を変えていきました。そして、ある日、体育の授業を見

学しているときに、飛び込み前転が上手にできた子がいて、先生がみんなにそれを手本にして練習させようとしていました。そのとき、先生が短い一言を発しただけでみんなの前転がすごくきれいになりました。ここで、注意とは短く一文で、しかも内容がしっかりしていて伝わりやすい必要があると思いました。

3つ目として、注意するときなどに発した言葉というのは、児童にとって影響が大きいということです。僕たちが言った言葉は思いのほか影響力が大きいのです。何気なく発した言葉も児童はずっと覚えています。そのため、慎重に言葉を選ばなければならないと思いました。

今回の学校ボランティアでは、見守ることの難しさを強く感じました。また、見守るときは危険がどこにあるかを注意深く見ていなくてはいけません。そして、自主的な活動を促す注意や助言も、短く伝わりやすくするなどの工夫が必要です。注意や助言というのは、児童の意識を変え、行動を変えることだと思います。また、注意や助言に使う言葉も、児童はずっと覚えているので、慎重に選ぶ必要があります。今回のボランティアで学んだことは、きっと中学校や高校にも何らかの形で生かせると思います。

7. 児童の為に

国際経営学科 2年 嘉瀬 剛史

私は後期の10月から12月までの3ヶ月間、平塚市立土屋小学校で学校ボランティアとして活動させてもらいました。活動時間は毎週火曜日の12:30～15:30でした。主なボランティアの活動内容はクラスに入り算数の丸つけや九九のテストなどの授業の補助や授業見学、卓球クラブへの参加などでした。他にも校庭の枝を切ったり、校内の片づけ、児童達の菊の手入れ、通学路の安全確認を事務員の方と一緒にする校務作業などです。その他にも低学年のクラ

スで一緒に給食を食べたり、掃除をしたり、昼休みに一緒に遊んだりといった活動を行いました。

私が今回小学校ボランティアを経験するまで校務の先生がどのような仕事をしているのか全く知りませんでした。今回ボランティア活動をしてみて校務の先生の仕事がどれほど大変な仕事か知ることが出来、それがいかに児童達の安全を守っているのかを知ることが出来ました。

まず、校務の先生は小学校の周りにはどのような危険があるか学校を周りながら教えてくれました。学校付近の通学路には高い木や竹があり、それが通学路に伸びてこないように土地の管理者の許可を取って整備し、また、先生の目が届かないようなところには児童たちが立ち入れないようにするなどの工夫をして危険を回避していました。

次に校庭の木の手入れの作業を行いました。なぜ木の手入れをするのかというと、木に蜂の巣が出来にくいようにするためです。外側から見て見栄えが悪くならないように内側の木を切り落とすなどの工夫をしていました。

そして児童達の菊の手入れですが、なぜこのようなことをするかというと土屋小学校は毎年市のイベントに自分たちが育てた菊の花を作品として出展しています。児童の中には菊の手入れを忘れて枯らしてしまう子もいます。しかしイベントの時に全員が出展できるように校務の先生が手入れをしているのです。

校務作業は裏の仕事でみんなの目にはなかなか映りにくいので校務の先生の苦勞を知っている児童は少ないと思います。しかし校務の先生は児童のことを常に考え、行動しているのだと学びました。

学校ボランティアに行ってみて、児童達は私たち大学生に対して本当の先生のように接してくれました。その中で私は積極的に話しかけてくれる児童とは仲良くなるのが出来たのですが消極的な児童とは、コミュニケーションがあまり取れませんでした。児童全員と平等に接し

なくてはいけないのにそれが出来ませんでした。だから、次回このような機会があれば全員と積極的にコミュニケーションをとっていきたいと思います。

今回ボランティア活動をしてみて学校というものは授業を教える先生だけではなく、校務の先生や地元住民の方々、皆の協力があって成り立っているのだと思いました。児童達と遊んだりしていく中でやっぱり教師になりたいと思う気持ちが強くなりました。しかし、今の自分には教師として必要なスキルがまだまだ足りないと思い知らされました。だからこれから卒業するまでの間にいろんなことを吸収して教師に必要なスキルを少しでも身に付けていきたいと思っています。

8. 陰での準備

数理・物理学科 2年 田山 政志

私は、水曜日午後から土屋小学校に学校ボランティアに行きました。活動内容として、まず、1年生、2年生、3年生のクラスの子どもたちと一緒に給食を食べ、その後、児童たちと一緒に清掃活動をしました。続けて5時間目、6時間目の授業を見学し、さらに校務の方の手伝いをたくさんしました。

水曜日の日課は5時間目で終わりだったり特別な活動があったりして、なかなか授業に入っただけで児童と一緒に活動するという機会はありませんでしたが、そのかわりに特別活動の準備をする機会が多くありました。

学校ボランティアを通して特に印象深かったのは、児童がよりよく学校生活を送るために校務の方がほとんどひとりで色々な準備をしていた、ということでした。

校務の方の「色々な準備」と一言言ってもそれは、本当に多種多様なことでした。初めて土屋小学校にボランティアに行った日も、授業

の補助に入るのだらうと思込んでいたのですが、1月の特別活動である書き初めに使う細い竹の切り出しという作業をしました。この作業で驚いたのは書き初めと言えばもちろん年が明けた1月に行う行事ですが、その時に使う竹を3か月前の10月の初旬にはもう準備しているということでした。この竹は半紙の上下を留めるために使います。児童全員分を準備しました。仮に同じような半紙留めを購入すると児童全員分なので費用がかなりかかってしまうそうです。校務の方によると、竹を使うと、その経費を抑えられるし、また、児童たちがいつも見ている竹を使うということに意味があるということでした。

この作業以外にもたくさん手伝いをしました。それは直接的には授業に関わってこないものでした。校庭や裏庭にある木々の剪定をしたり、児童たちが育てた花をプランターから花壇に植え替えたり、行事で使う教室を清掃したりしました。多くの作業をしているなかで、児童や地域の方が小学校に来た際によりよく学校で活動できるように、校務の方が常に気を配って、陰で準備しているということに気づきました。私が小学生だったときに何も不自由を感じることがなく学校生活を送っていたのも校務の方の陰での準備のおかげだったと、初めて気づきました。

10月から12月までの3か月という短い期間でしたが、今回の学校ボランティアでとても貴重な経験をたくさんすることができました。私が教員となった際には今回のボランティアの経験をいかしていけるようにしたいと思いました。

9. 遠くが見えるようになって

数理・物理学科 2年 豊原 太雅

私は平塚市立土屋小学校で10月～12月の間、

月に3回ほどの頻度で、水曜日の午後に学校ボランティアをさせていただきました。

短期のボランティアでしたが、活動から学ぶことは大変多く、将来、教師を目指す身としてはもちろん、普段の生活でも十分応用できるものと感じました。残念なことに、水曜日の午後は授業のある学年が限られていてあまり授業見学ができず、清掃や工作といった雑務的な作業が主な活動内容になってしまいましたが、逆に、そのことによって学校全体を隅々まで見学し、小学校ならではの多くの工夫に気づく機会を得ることができました。ボランティアで学んだことのひとつが、児童が元気一杯に学んで遊べる安全な環境づくりに向けた先生方の「工夫」が至るところにあったということです。

例えば、ボランティア初日に行った図書室の書架整理で気がついた工夫があります。図書の利用において、学術書や小説、絵本などの分類は資料の検索・閲覧という点で重要ですが、それよりも、図鑑といった重く大きいものは分類を無視して優先的に本棚の下段に配架されていました。児童がそれを運ぶときの怪我の発生を極力抑えるという「工夫」です。少しでも多くの児童が利用しやすいようにこうしていると担当の先生から伺いましたが、こういったところに視線を向けられるのは、図書室の利用者が児童であるということ踏まえて考えているからこそだと思いました。

他にも、学校裏の敷地で、書き初めの作品を飾るための掛け軸に使う竹を切ったり、校内の畑で育てた芋を焼く準備をしたりしましたが、書き初めの掛け軸にしても、焼き芋にしても、自然に囲まれた環境を最大限に活かした学習を児童にさせたいという、児童を第一に考えるからこそその先生方の「工夫」であると思いました。

このように至るところで「工夫」を目の当たりにし、その度、活動の担当の先生にお話を伺いましたが、改めて学校という組織内での先生方の連携・協力によって、児童の学校生活が支えられていると思いました。なぜなら、どの

先生にお話を伺っても、必ず一度は、「小学生はこういうことをしやすいから…」や「児童にとっては…」といった児童目線の補足があったからです。それは組織全体としての共通意識が徹底されているということを意味します。一致団結している先生方に支えられているからこそ、児童はあんなに楽しそうに友達と勉強し、遊ぶことができると、自分の目で見て確かめられたことはこのボランティアの活動の中で特に印象深く、改めて、児童の模範としての教師の振る舞いが大切だと思いました。

自身の小学生時代と比較し、遠く、周りが見渡せるようになった今、小学校内の先生方の多くの「工夫」に気がつくことができました。しかし、大学生の立場として「既存の工夫」に気がつくことはある意味当然であり、教師を目指す立場としては児童の行動を予測し、「未来の工夫」について考えなければならないと思います。教師となったときに土屋小の先生方のような「工夫」をするためにも、普段の生活から他人のことと思って行動すること、すなわち、周りをよく観察して、自分が他人のために何ができるかを考える力を養う必要があります、それこそ、教師として児童に見せる姿であるべきだと、ボランティアを通して感じました。

10. 見えない工夫

数理・物理学科 2年 中島 亜耶

私は、後期の毎週木曜日の午後に土屋小学校の学校ボランティアに行きました。ボランティアの内容は、子どもたちと一緒に給食を食べたり遊んだり、授業の補助や校務の方のお手伝いもしたりしました。今回の活動で特に1年生と給食を食べてコミュニケーションをとる機会がととても多かったのですが、他の学年とも沢山接する機会がありました。私が行ったのが木曜日の午後ということもあり、わくわく集会という

土屋小学校で行われている、学年に関係なく遊ぶ集会にも参加させてもらいました。

様々な活動をしていく中で特に印象に残ったことが2つあります。まず1つは、それぞれの立場ならでは子どもたちのための見えない工夫がたくさんあったことと、教員と子どもの関係性です。

1つ目は、教員の方たちは、授業に関して子どもたちが授業に引き込まれるような工夫をたくさん行っていました。そして児童主体の授業が行われていて、子どもたちもしっかり授業を聞いていました。今回の活動で、それを特に感じたのが小学校5年生の算数の授業でした。その回は、三角形や台形の面積に関するまとめの授業で宿題の解答や章末問題を解く時間など、演習がほとんどでしたが、前回出された宿題の自分の発表をしたり、先生のチェックが終わった人は自分の解答を見ながら他の人の丸付けをしたりしていました。参加型授業で聞いている私も参加しやすい授業でした。私も実際に先生という立場になったときは今回の授業のような工夫も是非取り入れたいと思いました。

また、校務の方のお仕事の活動の中で、子どもたちと直接関わる機会は担任を持つ教員より少なくとも、子どもたちの安全のためにたくさん工夫が行われていることに気が付きました。校務の方は主に裏方のような作業が多いので、敷地内の木々の伐採や子どもたちが授業内で使用する道具等の整備などでした。校務の方との作業で主に行ったことは、敷地内にある木や畑などの整備関連です。子どもたちの安全のために、子どもたちの登下校や昼休み中は重機を使った作業は行わないということや、木の切り方に一工夫加えて毛虫がつきにくくすることも聞きました。私が小学生のときはあまり大変さを知らなかったのですが、今回の活動で校務の方のお仕事にも触れる機会があったのでとてもよかったです。

もう1つの教員と子どもの関係性について、どの学年も先生と児童というしっかりした立ち

位置がお互いにわかっている感じがしました。土屋小学校は私が思っていた以上に1学年の人数が少なく全学年合わせても119人の小規模な学校です。小規模だからこそ、同級生同士に限らず違う学年の児童たちとも仲が良かったり違う学年の先生とも仲が良かったりします。児童一人ひとりもとても素直で私が給食を食べたりするときも沢山お話をしてくれました。一般的には学年が上がるにつれて年齢的にも先生に反抗する児童が増えると言われますが、土屋小学校の児童は先生に反抗することもなく、みんな先生に従っている印象でした。

3か月という短い期間でしたが、今回の活動でとても貴重な経験をたくさんしました。そして子どもたちとのいい関係を少し築けたのではないかと思いました。自分が現場に立った時にぜひ今回の経験を活かしていきたいと思えます。

11. 自らの経験を活かして

情報科学科 2年 川尻 みほ

2013年10月～12月の期間で、平塚市立土屋小学校に、初の小学校ボランティアとして参加しました。週に1回、水曜日の12時55分から15時30分の時間帯で参加していたので、計7回の活動でした。活動内容としては、子どもたちとともに校内清掃を行ったり、5時間目の授業サポートに入ったり、校務さんとともに子どもたちが過ごしやすくなるよう学校内の整備等の活動をしてきました。授業サポートとは、小学生の受けている授業に、担任の先生とともに入り、後ろで児童たちの様子を見ていたり、子どもたちが個々に活動する場合は、その補助に入ったりすることです。私が体験してきた活動は、初めての体験が多く、毎回参加するたびに、得られるもの・学ぶことも多く、とても楽しい時間を過ごすことが出来ました。

実際に参加して率直に思ったことは、不安になる必要がなく、今後の課題が見つかる活動であったということです。子どもたちは、いつも元気で、参加するたびにたくさんのお話を聞かせてくれて、「あのね、聞いて、聞いて・・・」などと声をかけてくれました。他にも学生ボランティアの方が、小学校には入っているので、自然と先生や児童との関係は出来ていました。そのため、最初の日からたくさん子どもたちや、先生方とお話することができ、毎回の活動を楽しく過ごすことが出来ました。

学校ボランティアの一環として、小学校の感謝祭であるりんどう祭にも参加させてもらいました。私はりんどう祭で「ミニピアノコンサート」の企画を担当しました。ピアノコンサートでは、あまちゃんや、AKB48などのj-popを中心に構成して弾きました。このりんどう祭を通じて、より子どもたちとの距離が近くなり、また、以前から得意であった音楽を授業サポートで活かすきっかけになったと考えています。

その次のボランティアの日からは、子どもたちから「あっ、ピアノのお姉さんだ!」とか、「あの日楽しかった!」などと廊下で歩いたりするといわれるようになりました。私がピアノを演奏したことで、子どもたちの印象に残ったこと、そして、りんどう祭に参加したことで、この学校ボランティアにつながったということがとてもうれしく思いました。りんどう祭をきっかけに、授業サポートも音楽の授業をメインに入れていただきました。

音楽の授業サポートでは、基本的に子どもたち一人ひとりの練習に対し、リズムを教え、ちゃんと演奏できているかの確認をしたりなどを中心にサポートしました。教える際、自分の中では分かるリズムなども、実際に子どもたちに伝えるとなると、分かってもらえなかったり、うまく伝えられなかったりと多くありました。どうやって伝えるかなどを考えて、実演してみたり、手で叩いて教えたりなど、工夫して教えることで、子どもたちに伝わりやすく、ま

た分かってもらえたようだったので、今後も活かしていこうと勉強になりました。

この小学校ボランティアを通じて、今までのボランティア体験では経験できなかった、先生と児童という立場でのボランティアや、りんどう祭を通じて、ピアノを習っていたことを活かし、音楽を中心に授業をサポートできたことは、自分の中で、初めての体験であり、とても学びある体験でした。初めての学校ボランティアでなかなかうまく出来ず、次からはこうしたほうが良いという反省点があくつもあるのですが、これは、実際の教員になってからも使える学びだと感じています。今までは教わる側にいた自分が、次は教える側に立つので、今後も学校ボランティアに参加し、実際の現場に出てから役立つ技術や、授業の構成などを学んでいけたらと思います。

12. 裏方の視点

化学科 2年 森本 耕平

私は10月から12月までの木曜日の13:00から土屋小学校の学校ボランティアに行きました。私が学校ボランティアに参加した理由は、この活動で授業の手伝いを経験するためでした。しかし、実際の活動内容は思っていたものとは異なり、校務の手伝いが主で、授業は3回のみでの参加となりました。校務では、倒壊した倉庫の解体、花の植え替え、植木の手入れ、学校敷地内の説明、竹の枝打ち、りんどう祭の準備、腐葉土作り、畑の土作り、タイル貼りなど実に多種多様な手伝いをしました。授業では体育、音楽、算数の授業にも参加させていただきました。

様々な校務は、楽しく、和気あいあいと作業できました。しかし、その作業はどれも児童の見えない場所で行われていました。ほとんどの作業では工具や刃物を使用した作業が多く、振

り向いた際に児童がいると危険です。しかし、児童はこのような作業を目撃すると興味を持って近づいてきてしまうことがあります。そのため、周囲に児童がいない場所や時間帯に行われました。ほかにも学校敷地内を見ているとき、植木の切り方の説明で、「外からはボリュームがあるように、中は空洞になるように切る」と言われました。そうすることで外側からは葉につく虫が発見しやすいとともに立派に見え、内側からは蜂などの巣が見つかりやすく、木に囲まれた中で児童が遊ぶことができるということでした。タイル貼りでは、「土屋小学校140年」の文字を作る際、正方形なら児童でも貼れますが、割れて細かいタイルは大人が行わなければなりません。全て大人がするのではなく、児童ではできない部分をこちらがやりました。以上のような児童の見えないところでの活動の仕方をボランティアの初日から作業を通して教えてもらいました。

私は最初、授業の手伝いが主になると考えて行ったため、校務の手伝いは想定外でしたが、うれしくもありました。私は昼食を小学校で取れないため、昼休みに児童と触れ合うことは難しく、授業を通して体験できることがあるのではないかと考えていました。実際に校務を手伝ってみると、今までとは異なる立場から学校を見ることができました。花の植え替えや、掛け軸用の竹などは自分の頃は気が付いたら植えてあったり、準備されていた程度にしか思っていませんでした。自分で実際に裏方の仕事を体験することで、自分ではわからなかった様々な気遣いを知るとともに、自分の今後に生かせる貴重な話を聞くことができました。この体験はとても貴重で、教員になるために、大学では学ぶことのできない教え方を実践的に学習し、採用試験の際、役立てたいと考えて参加したのですが、この考えは大きく変わりました。児童の見えないところでどうかかわっていくということ、そして、児童の安全を最優先に考えて行っていくことは大変参考になりました。児童

と遊んだり、会話をしたりすることは少なく、教師側の立場として学校に行けたわけではないのですが、この裏方の視点を体験したことで、教師になるうえでも少なからず何かを得られたのではないかと思います。これからも時間を見つけて、可能な限り参加をして、何か1つでも自分が行ってよかったと思える物を見つけていきたいと思っています。

13. 考え方の育て方

総合理学プログラム 2年 須鎌 雅士

私は10月から12月まで毎週土屋小学校にてボランティアをさせていただきました。毎週木曜の12:40～15:30の小学校で昼休みから5、6時間目にあたる時間に活動しました。

活動内容は校務作業や授業のサポートで私が小学生であった頃を思い出しながらも別の視点から学校の様子を見ることができました。別の立場から学校を見ると、校内の樹木の植え方や危険物の扱い、他学年を交えての集会など日常の学校生活の中にも多くの工夫や配慮が施されていることに気が付きました。

そういった中でも、何度か見学させてもらった実際の授業内では生徒に対する工夫が多く、勉強になりました。特に5年生の先生の授業はとても印象に残りました。

その日に見学させてもらった5年生の授業は算数で平行四辺形や三角形の面積の求め方について考える授業でした。教科書には3パターンの三角形の面積を求める式が書かれてあり、それぞれの式の意味を児童が説明していました。ほとんどの児童は三角形の面積を求める公式が底辺×高さ÷2であることを知っていましたが、違うパターンの求め方を自分の言葉で説明するのは難しいようで最後の問題は誰も手を挙げない状態がしばらく続きました。もし、私が先生ならこの時点で答えを言っていたと思いま

す。しかし、先生はあえて答えを言わずヒントも出さずに誰かが答えるまでじっくり待ちました。10分程経ちようやく一人の手が挙がりました。なんとか文章にしたその説明に対しはじめてヒントが出され、その後何人かの手も挙がり、最終的に児童の説明で足りない部分を補って先生が説明していました。45分しかない授業で10分待ち続けることはなかなか難しいことだと思います。学年が上がればやらなければならないことも増え、なおさらだと思いますが、ただ公式を覚え機械的に計算をさせるのではなく、どうしてそうなるのかまで意味を考えさせる授業に、教師は教えることだけではないと気付かされました。

授業の後半では三角形の公式や平行四辺形の公式を使った問題練習をしていました。ここでは早く解けた人が次に終わった人の丸付けをし、間違っていたら違っている箇所について教えてあげていました。そうすることでお互いに理解を深めるだけでなく、助け合い、クラス全員が参加している授業になるのだと思いました。

今回のボランティアで授業を見せてもらったどの先生も、方法は違っていました。児童の心をつかみ授業を進めていました。声のトーンや児童との距離感、集中のさせ方なども児童や学年によって違い、実際の教室でしかわからないことをたくさん学ばせてもらえました。

現在、私は個人塾の講師をしています。学校の先生方と比べるとまだまだ足りないことが多いと感じました。教師というのは知識を植え付けるだけでなく、児童の立場になって考え方を育てていく必要があります。そのためには児童の興味を引きつける工夫が大切だと思います。

土沢中学校

1.4. 愛のある教え方を模索する

情報科学科 3年 水戸 紘子

今期は2ヶ月間、毎週木曜日の午前中に土沢中学校に行かせていただきました。去年の活動から時間が空いてしまったことや、午前中の活動のみで生徒と触れ合う時間が少なかったことなどがあり、少し緊張しながら過ごしたあつという間の2ヶ月間でした。活動内容は数学の丸付けや遅れ気味の生徒への手助けが中心でしたが、今回は生徒の補佐について学ぶこと以外に、授業について多く勉強させていただきました。

私自身が大学3年生となり授業を考えていくことが多くなりました。特に夏休みからは自分の担当以外の授業もしっかりと考えるようになり、中学校の範囲であれば、どの単元がどのような順番で教えられていくのかわかるようになりました。授業について考えていると今まで見てきた様々な授業を思い出し、早く学校ボランティアに行つて学びたいと感じるようになりました。

いざ後期になり、久しぶりの土沢中学校の授業を見ていると、先生の教え方が去年と少し違うような気がしました。そこで去年のメモと今年のメモを見比べてみると特に変わっているところはありませんでした。どうしても気になったので授業後に先生に伺ってみたところ「方針を変えたのは2年前で今は前の教え方と今の教え方、どちらが生徒に伝わりやすいか考えているところ」ということでした。大学に戻り、先生の言う2通りの教え方について考えていたときに、ふと去年の授業の情景を思い出しました。加えて、この範囲の授業を夏休み中に考えていたことを思い出し、その板書案を見てみる

と、去年の先生の授業をしっかりと思い出すことが出来ました。その授業は方針や内容を変えたというわけではなく、授業の中で重視している点を少しずらしていたということに気付くことができました。それから再度、先生の教え方を再現し考えていくと、ずらした意味や2通りの方法の利点などを深く考えることが出来ました。

この経験で驚いた点はベテランの先生が教え方を模索しているということでした。教師となり何度もその範囲を教え続けてきた先生が方針を変えることがある。そのことが私にとって衝撃的でした。今思えば、きっと、教師がそんなに教え方を変えてはならないと感じたために衝撃を受けたのでしょう。その授業から1週間後、数学の授業の後、違う内容で先生に質問しに行きました。すると先生は質問に答えながら「でもね、あのクラスはね」や「最近の子どもだとね」といった表現を何度も使いました。そのとき前回の授業後の会話にもこういった言葉があったことを思い出しました。そうしてまた一つ気付くことが出来ました。先生は目の前の生徒のことを一番に考えて、どの方法が伝わるのか、目の前の生徒が数学に興味を持つためにはどのような表現が良いのか、などを常に模索し続けていました。それに気付いたとき教育に対する強い愛をこの目で見る事が出来たのだと感じました。

常に向上心を持つことを忘れないことは教師にとって当たり前のことであり、私も常に心がけてきたことでした。しかし、その向上心は義務感や責任感などから生まれるものではなく、愛から生まれるものであり、それが日々の中学生活に生きてきているのだと強く感じました。

1 5. 環境に応じた指導

数理・物理学科 2年 稲葉 沙樹

私は土沢中学校に毎週2回程度訪問し、月曜日は授業の補助、木曜日は数学補習の補助をさせていただきました。月曜日は主に1年生の授業中の机間指導で、作業が進んでいなかったりわからないところがあったりする生徒を指導しました。木曜日の補習では、自分から補習を受けたいという生徒が集まり、用意されたプリントを解き、わからないところを一緒に考えて指導していきました。

両方とも教えるという点では同じなのですが、環境の違いで教え方や教えやすさの違いを感じたので、その点について比較し、まとめていきたいと思います。

まず授業の補助では、わからないところがあったとしても周りにたくさん友だちがいて私たちに聞くのが恥ずかしいのか、わからないと言ってくる生徒が少なかったです。しかし作業が止まっているので指導したり、間違えているところを指摘すると素直に答えてくれたりする生徒が多かったように感じます。中にはまったく反応を返してくれない生徒もいましたが、月曜日の授業では先生と補助の先生、そして大学生ボランティアが5人もいて、かなり大人数に囲まれている環境だったので、生徒の立場からすると少しうっとうしかったのかもしれませんが。また、授業中ということもあり、わからない問題を教えていたら先生が解説を始めていて「(わからないところを解いていたから)1問目の答えがわからなかった」と言われてしまい、かえって生徒の邪魔をしてしまったことがありました。あくまで授業なので、しっかり先生の声に耳を傾けて生徒を授業に参加させてあげなければいけないと反省しました。短い時間の中で何人もの生徒に簡潔に指導していくのは難しかったです。

次に補習は、毎回受けたい生徒を募り放課後に数学の補習を行い、私は主に3年生を受け持ちました。受験が近いということもあり、人数も多かったのですが、全員女の子だったので、比較的是じめからなじみやすかったと思います。補習は授業と違って始めは雑談も交えつつ和気藹々と進めていき、わからないところがあるとすぐに聞いてくれたり、友だち同士で教えあったりなどしていました。3年生ということもあり、受験もあるのでみんな真剣に取り組んでくれました。わかるまで何度も違う方法で説明し、授業で使ったプリントなども見ながらわかるまで繰り返しの指導となりました。友だちとどっちが先に解けるか競争していたり、お互いに教えあったり考えたりと、いい刺激になっていた気がしました。わからないことを恥ずかしがらずに聞ける環境の大切さを感じました。授業中はなかなか聞きにくく時間も短く限られているので、補習に参加してわからないところを理解して自分の力にしていくのは大事なことだと思います。教える立場としても、どんどん説明に対して疑問をぶつけてきてくれたのでこちらも答え甲斐がありましたし、ノートやプリントを見せてもらいながら生徒にあった教え方ができたのでやりやすかった印象があります。

回を重ねるごとに何回も同じ生徒と会い、少しずつ話ができて名前も覚えてもらえたのでとても嬉しかったのですが、逆に教師になったときあまりにも友達感覚で接してもいけないし、距離がありすぎてもいけない、あくまで先生と生徒という関係なのだということを考えなくてはならないと感じました。

このボランティアを通して生徒と接する機会を作れたこと、実際に現場に入って授業を見学させていただけたこと、とても貴重な時間を過ごすことができました。

16. 生徒へ教えることの配慮

数理・物理学科 2年 岡田 一樹

10月25日から12月20日まで計7回(金曜日13:40～14:30)、平塚市立土沢中学校で学校ボランティアをさせていただきました。主な活動内容としては1年A組の数学の授業に参加し、問題が解けない生徒に対し解答の方法を教えることと理科室の整理(人体模型の解体、古くなった顕微鏡の片づけ等)でした。

今回の学校ボランティアを通して沢山のことを学びましたが、その中でも「先生の生徒への配慮」と「私の語彙力の無さ」、この2つが最も印象に残っているので書かせていただきます。

最初に、今回のボランティアで全体的に感じたことは授業内・外に関わらず先生方が生徒への配慮を欠かしてないということです。例えば、掛け算の記号は・ではなく×で書く、次の理科の実験で生徒が今やっていることが分かるようにするために学習ペーパーを作成するなど生徒への何気ない配慮をととても多く見てきました。その中でも頭に残っていることが「集中力が無い生徒」への配慮です。

数学の授業に参加させていただいたとき、お昼ご飯後の授業ということもあってか一部の生徒の集中力がありませんでした。その時先生はある程度説明を終えた後に生徒を指名し問題を解かせたのです。それから生徒全員が引き締まったような顔つきになりました。先生がただ教科書を読むだけでなく、問題を生徒に解かせることによってある程度の緊張感が漂い、生徒が集中力を維持出来ていることが感じられました。また、先生は集中力のない生徒に対しても諦めず、最後まで説明をしていました。

次に感じたことが私自身の語彙力の無さです。学校ボランティアで教えるのは中学1年生、この前まで小学生だった子です。そのため私が考えている問題の解き方、答えを噛み砕いて説

明しなければなりません。机間指導をしていて、生徒に解答の仕方を教える時に私の説明力、語彙力の無さによって余計混乱させてしまったことが今でも忘れられません。うまく言葉にして伝えられない悔しさがありました。

今回のボランティアで私は自分の未熟さを痛感しました。私は「分からない生徒を出さない」という教師像を理想としています。そのためには語彙力をつけるのが必須の条件と考えています。語彙力だけでなくこれからたくさんことを学び、吸収しなければ教師にすなられないと思いました。このボランティアで体験したのは日常の大学生活やアルバイトでは分からない、学校という現場でしか感じられない雰囲気でした。そして、子どもを好きでなければ教師という仕事はなりたないということを先生方からお聞きして、教師になる上でも貴重なことを沢山学べ、教師になりたいという思いが強くなりました。

3年次生になり時間割に余裕ができたなら一日ボランティアに行こうと考えています。そこで実際に教師の1日を体験し、自分の糧にしていきたいと思っています。最後に、土沢中学校の先生方に深くお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

17. リズミカルな授業の中で 見つけた細かい工夫

数理・物理学科 2年 佐々木一樹

土沢中学校で金曜日5時間目に1年生の数学の授業補助を行った。先生が説明している時は、一番後ろで授業を見学し、先生が生徒に練習問題などを解かせている時は、生徒がわからなそうにしている時に教えてあげる授業補助を行った。

最初に参加した授業は、比の概念→比例式→比例式の性質という展開だった。授業の流れが

とてもスムーズだと感じた。そこには、多くの細かい工夫があった。

比の概念を説明するときに、例えば $5:3=5/3$ となることを教える時に「:」の間に「-」を入れて「÷」の形にしたりしていた。

また比を分数に変えることを教えたあとに比例式が展開された。比例式は例題の以下の問いを解きながら説明された。

(1) $x:9=4:3$

(2) $15:20=36:x$

(1)の問題では先に述べた概念を生徒に問いかけながら授業は行われた。また、(2)の問題では、(1)では変数 x が分子にくるが(2)では変数 x が分母にくるという違いがある。私が解く場合には、分母に変数 x がきても分子に変数 x がきても両辺の約分を行い簡単に解いてしまうが、中学生は分母に変数 x がくると約分が出来なくなり、 $3/4=36/x$ のところから手が止まってしまっていた。そこで先生は、

(i) 両辺に $4x$ をかける

(教科書に載っている解法)

(ii) 分母または分子の倍率を比較するという解法

(分子が左辺から右辺にかけて1.2倍されているので分母も同じように1.2倍されたものが x であるという考え方)

(iii) 逆数をとる

((1)の場合と同じ視点に変える。)

といった3パターンの解法で教えていた。

次に、比例式の性質($a:b=c:d \Rightarrow ad=bc$)の説明に入った。ここでは先で行った比例式から項をすべて a, b, c, d の文字に置き換えて先の例題(1)と同じような解法で解き、比例式の性質の説明を行っていた。また、ここで言葉の説明では、「外項」は「外側の項の積」、「内項」は「内側の項の積」などと言葉の説明を言葉で構成している意味の内容から関連づけて説明を行っていた。

このように、授業の中には多くの工夫が施されていた。また、この授業で中学生は比例式を

解くときに分母に変数 x がくると解けなくなってしまうことから、一つひとつの事が独立してしまっていて1つのルールにのっていないような気がした。だからこそ、この授業のように、前で行ったことを次へ繋げていくような授業展開が重要になってくるのだと思った。

今回、この学校ボランティアを通して、中学生はどういうところで手が止まってしまうのか、また、そこで教師にどういう工夫が要求されてくるのかを考えさせられ、学びました。ただ人に教科書通りに教えていくのではなく、そこにマニュアルを超えた先生自身の細かい工夫が施された授業に参加できたことは、とても貴重な体験だったと思う。このような体験を今後活かしていきたいと思った。

18. 教えるだけが教師じゃない

数理・物理学科 2年 芹澤 郁之

今回私は、初めて学校ボランティアに参加しました。中学生が相手ということもあり、自分からすべてを受け入れるつもりで活動しました。今回の活動は、理科と数学の授業支援ボランティアでした。

数学の授業では、問題演習において分からない生徒がいたときに生徒に指導してあげることが主な活動でした。学習指導要領が変わったこともあり、私が習っていないような単元を教えることが数回ありましたが、教科担任の先生の説明により、内容をすぐに理解することができ、分かりやすく教えることができました。

理科に関しては数学同様、問題演習において生徒に説明することも行いましたが、そのほかに理科室の整理を行いました。内容としては、理科室内の顕微鏡などを、生徒が取り出しやすい場所に移動させたり、いらぬものを処分したりすることでした。3・4回整理を行いました。初めて理科室を訪れた時より、きれいに

することができました。

今回、学校ボランティアに参加したことで、今までの視線とは違う立場で、学校というものを見ることができました。それは、生徒としてではなく学校で仕事をする教師側の視点であることです。私が中学生であったころは、当たり前のように授業が行われ、教材が配られ行事が行われました。これらのことができたのは、先生や事務の方たちがいろいろ考えてくれたからです。そのことを改めて実感することができました。

学校ボランティアに参加して、教師の仕事の大変さを多く知ることができました。私は今まで、教師の仕事は授業をすることが主な仕事で、そのほかの仕事はあまり多くないと思っていました。しかし、実際の現場を見てみると私が思っていたのとは真逆で、授業よりも授業以外の仕事のほうがたくさんあることを知りました。例えば今回、理科室の整理整頓を理科の先生に頼まれて行いました。私が訪れた中学校には理科の先生が一人しかいないということで、理科の先生の授業以外の雑務の一つとして理科室の整理整頓を行いました。薬品などの整理は、理科の先生でなければできません。ほかに何人かいれば楽になるとは思いますが一人しかいないと、すべてを自分でやらなくてはなりません。もちろん授業に備えて教材を作ったり実験の準備をしたりもします。そのほかにも、部活動の管理であったり、来客との面会だったり、どの先生方も同じように授業以外の仕事を多くこなしていました。

教師の仕事は、生徒が安心して学校生活を送れるようにするというのが一番の目標である今回この体験を通じて感じました。学校で、様々な体験をすることができるのは先生があらかじめしっかり準備を行っているからです。この準備をするという作業が学校という組織を支えているのではないかと思います。授業をするにあたって、どこを中心に教えていくかなどあらかじめ方針を立てておかないと、うまく授業を

することができません。また、学校行事においても多くの準備が必要です。

教師を目指していくうえで、何事にも多くの準備が必要であるということを経験に銘じながら、私はこれからの勉強に励んでいきたいと思っています。

19. 生徒の現状、教師の課題

数理・物理学科 2年 高橋 雄亮

私は10月から12月にかけて、土沢中学校へ行き、学校ボランティアに参加しました。活動日は基本的に毎週水曜日の5時間目(13:40~14:40)の3年生の理科と、毎週金曜日の1時間目(9:05~10:05)の1年生の数学に参加しました。それ以外にも不定期に他のクラスの数学を見たこともありました。

数学は授業中に行われる練習問題でわからない生徒に教える補助等を行いました。期間中に行われた内容は「方程式の利用」～「平面図形」でした。

理科では授業のサポートや理科の実験の準備や事前実験等を行いました。実験等の準備では普段できないところまでさせてもらったので、良い経験となりました。

前期でもこの中学校で学校ボランティアに参加していました。前期の時は数学、理科だけでなく、国語、社会、英語、体育など様々な教科に参加し、それぞれの先生の教え方のポイントや板書の仕方などを学ぶことができました。

今期は自分の専門の数学、理科のみを集中して見ることができ、また、その中でも特に「生徒の現状、教師の課題」について強く感じるものがありました。

まず、生徒の現状について、活動を通して感じたことは、勉強の内容の理解度が低くなっている点です。この理由について先生との会話やニュースなどを見て感じたことが、①新学習指

導要領による要因，②地域による要因，③勉強に対する関心・意欲があまり見受けられないこと，の3点でした。

①については自分たちが中学生の時と比べ，上の学年の学習内容が下の学年に下がり，また，1年間で習う内容が増えて，今の子どもは覚えるのに精一杯なのではないかと思いました。現に2,3年生を見ていると，前学年の内容を覚えておらず（または理解しておらず），今学習している内容も理解できていない生徒が多かったです。

②に関してはこの学区一帯はほとんど塾がなく，自宅学習か，または授業のみの生徒が多いと聞きました。自宅学習にも限界があるのか，勉強の仕方がわかっていない生徒も見受けられました。これも要因の1つではないかと考えました。

③については理系科目の苦手な生徒がこれに一番当てはまると思いました。

この内容を踏まえて，1人でも多くの生徒が授業に関心を持ち，かつ理解できる授業づくりをしていかなければならないと改めて感じました。また，塾の少ない環境の地域では，土沢中学校でもやっているような放課後の勉強会も重要だと感じました。

学校ボランティア活動前後での自分の変化として，どんな工夫をしていけば良いか，どうしたら理解しやすく関心を持てる授業づくりができるのか，積極的に授業を受けてもらうにはどうすれば良いか，と今後の自分の課題も見出すことができました。

今回参加した授業は1年間のほんの一部分にすぎません。また，来年も参加して，自分の将来のためにこの経験を活かしていきたいと思います。

20. 生徒たちの学習意欲とその実態

数理・物理学科 2年 三澤 達也

私は，10月上旬から12月下旬にかけて土沢中学校でのボランティア活動に参加しました。主に毎週金曜日の第5限目にある数学の授業に参加しました。基本的にはその時間に1年生の授業を見ていましたが，補習や3年生の授業，それと理科の実験の準備に1回ずつ参加しました。1年生の授業内容は，方程式，比例・反比例，平面図形についての学習でした。私の活動内容は生徒が演習しているときにつまづいている生徒にヒントを与えるというものでした。3年生の授業では相似を扱いました。補習では，1年生から3年生までが数人集まり，プリントでテスト対策をしているところを手助けしました。

生徒の授業態度を見て感じたことがやる気の有無と理解の曖昧さです。出題された問題にも真っ先に取り組み，授業中もよく発言する生徒もいれば，授業についていけず，演習問題にもあまり積極的に取り組まない生徒もいます。また，わからないことを聞かずにそのまま放置し，たとえそれを教えられても，その場しのぎの返答をして，本当に理解しているのか曖昧な生徒もいます。生徒が授業を受け，そこで学んだことを理解して自分の知識にするはずが，予想以上にその意欲のない生徒がいるという印象を受けました。

基本的に先生が生徒全体に話をしているときには，我々大学生は後ろから授業の運営の仕方を観察し，生徒の様子を見ていましたが，板書を写さず，話も聞いていない生徒も見られました。そして演習に移り生徒の様子を見てみると，そういう生徒は当然何もせず，考えているかどうかも分からない。そういったときに我々がまた一から教えるのですが，そこで感じるのが，生徒が理解しているのかどうかということです。当然，教えたことを理解して次の問題に活かしている生徒もいますし，そういう生徒はや

やはり自分から進んで学ぼうとしているのがわかります。しかしそうでない生徒もいるのが現実です。やはりそういう生徒は見ていてわかるもので、教えたことを分かったフリはしますが、実際似たような問題を再び解こうとすると、またつまづきます。

この繰り返しを今までしてきたのだろうとも思いました。ここから勉強に対しての意識が低くなり、今に至っていると思うと、これはすごく悪い循環にはまってしまっていると思います。また、このような勉強の遅れは周りとも差が浮き彫りになり、学校生活にも支障が出て、不登校やいじめなどにも少なからず繋がってしまうのではないかと感じました。ただ、この状況に対して教員側も一人ひとりにまで手が回らないというのも厳しい現実なのだと思います。先生方が教えている様子を見ても、我々からすればとても分かりやすいように感じましたが、生徒はあまり理解しているようには見えませんでした。

未熟ながらも、私も生徒に教えたわけですが、たった一人の生徒になにかを完全に理解させるのも困難なことが多々ありました。それを20人を超える生徒たちに教えるのだから、当然難しいと思います。ただ、たった一人の生徒でも教えたことを理解してもらえた時の嬉しさはやはり大きなものでした。決して簡単なことではないですが、これができるようになりたいと、このボランティアでは強く感じました。

21. ボランティアで気づけたこと

数理・物理学科 2年 山田 奈織

私は、10月から12月にかけて、土沢中学校のボランティアに参加し、主に1,2年生の数学の授業のサポートをさせていただきました。その中で、授業中の問題演習の時間などに、分からない子のそばに行ってなるべく丁寧に教

えたり、時には授業に集中していない子に注意したりと、なかなか体験できない貴重な経験をたくさんさせていただきました。初めてのボランティアということもあり、緊張していて最初は自分から積極的に生徒に関わることができなかったのですが、段々と慣れてきて、生徒にも自分から話しかけたり、生徒から話してくれたりして、とても嬉しかったです。

そして、今まで生徒という立場でしか授業に参加したことがなかったのですが、今回、初めて先生寄りの立場にたって授業を受けてみて、多くのことに気づかされました。

まず、生徒は一人ひとり、勉強の出来具合が違うということです。これは極当たり前のことですが、自分が生徒として授業を受けていたときには、あまり気にしなかったことでした。すごく勉強ができてどんどん先に進む子もいれば、今授業でやっていることどころか、そのずっと前のことすら理解できていない子もいる。そういうことが、客観的に授業をみてみるととても顕著に分かりました。教師は生徒それぞれがどれくらいできるか、きちんと把握した上で、一人ひとりに対応していかなければいけないと気づきました。

次に、学年によって授業風景が違うということです。1年生はやはり小学校からあがったばかりでその気分が抜けていないのか、にぎやかな授業でした。2年生は先生が質問すると返事が返ってくるくらいで、割と静かな授業でした。たった1年だけでこんなに違うのかと少し驚きました。学年だけでなくクラスによってももしかしたら違うのかもしれない。みんなが積極的に発言したりするにぎやかなクラスもあれば、すこし消極的で静かなクラスもあるでしょう。生徒が十人十色で一人ひとり違うように、その生徒たちが作り出すクラスもまたそれぞれ違う。それぞれのクラスにあった授業ができるような教師が学校には必要なのだと気づくことができました。

最後に、「教師」は大変な仕事だけでもやり

がいがあるということです。先ほど述べたようなこともしなければならぬし、生徒のなかには授業中まったくやる気が無い子もいます。そういう子をいかにやる気にさせるかも考えながら授業をしなければなりませんし、もちろん授業だけしていればいいわけでもありません。雑務もやらなければならぬでしょう。しかし、それらを行ったうえでそれが生徒のためになったり、生徒が喜んでくれたりするのなら、それまでの苦労は全て帳消しになり、教師になってよかったなあと思うのかもしれない。そういう仕事はなかなか他にはないのでやっぱり教師という職業はとても素敵だと気づくことができてよかったです。

今まで述べたようなことはボランティアに参加しなかったら絶対に気づくことができなかつたことばかりです。本当に参加してよかったと、心から思いました。そして、これからも積極的にボランティアに参加して、自分自身が教師になるための準備を少しずつ進めていけたらいいなと思います。

2.2. ベテランだからこそ分かる事

数理・物理学科 2年 湯地 弘季

私は、10月7日から12月16日までの毎週月曜日に土沢中学校にボランティア活動に行きました。主に5、6時間目の授業に参加させてもらい、ほぼ毎回6時間目には1年生の数学の授業が入っていました。5時間目は、主に理科の授業が入っており、理科室の掃除や整理などが主で、時々、2年生の理科の授業を見学させてもらう機会がありました。文化祭の準備で、6時間目の授業が潰れた時がありました。その時は、学生ボランティアのメンバーでパソコン室に向かい、「出入禁止」の張り紙の作成をするという日がありました。また、テスト期間中で6時間目がなくなるという日もありました。

今回、ベテランの先生が行う授業を生徒という立場以外で見学させてもらい、数々の発見をしました。ベテランであるからこそ、色々気付いていること、解かることがあり、経験を重ねることの大切さを教わりました。これからそのことについて述べたいと思います。

主に数学の先生から学んだことです。初めてボランティアに行った日の授業の後に先生が言われた言葉なのですが、「生徒の中には、プリントの問題を解くスピードが速い子もいれば、全然進んでない子もいる。プリントの問題を解くスピードが速くても間違いが多い子だっている。解くスピードが速くても、途中式を書いてごらんと行って書けない子というのはちゃんと理解していない」とおっしゃっていました。これは長年生徒をよく見てきたからこそ分かるようになってきたことだと思います。

ある時は、面積の比率の問題を今度やるとのことで、黄色い大きい方眼紙に三角形を書き（この時、直角三角形は書かない方が良く指摘されました）、隣にそれぞれの辺が2倍になった三角形を書きました。次に長方形を書き、それぞれの辺を3倍にした長方形を隣に書きました。そして今度はピンクの大きな方眼紙を用いて最初書いた三角形を4つと長方形を9つ書きました。それらを切り取って黄色い大きな方眼紙に書いたそれぞれ大きい方の三角形、長方形に張り付けることによって、それぞれの辺が2倍になると面積は4倍、それぞれの辺が3倍になると面積は9倍になることが視覚的にわかるようにできていました。これには、本当に凄いと感激しました。これは、経験を積むことによって、生徒の理解度を把握し、生徒たちにとってわかりやすく伝わるのか理解できるのかをいままでの経験から学び、活かしてきたベテランだからこそできることなんだと思いました。

2.3. 自己の問題点の発見

理学部 化学科 2年 福本 健志

私は今期初めてこのボランティアに参加させていただきました。私は先生方がどのように授業を展開しているか、生徒とどのように接すればいいか、また生徒が理解しやすい教え方などのようなものか等、できるだけ多くのことを吸収することを目標としました。何を学ぶことができたか、私の経験を述べていきます。

今回お世話になったのは土沢中学校の方々で、担当は理科と数学、特活の授業支援としてお手伝いさせていただきました。始めのうちは緊張し、生徒との接し方がわからず、あまり話すことができませんでした。しかし、生徒の方から積極的に話してくれたため、私も自ら声をかけるようになり、心の距離を徐々に縮めていくことができました。ただ、友達と話す感覚に近かったため、話し方がやや教師的立場として不適切ではなかったか、というのが反省点です。

活動内容を大まかに分けると、生徒の授業支援と授業外の補助です。数学の授業中に私が行ったのは、生徒が練習問題をやる際にヒントや考え方を伝え、答えを導けるような補助をしました。答えを言うことは生徒のためにならないと思い、言わないように心がけました。復習では、同じ系統の問題であるにも関わらず、問い方が少し変わっただけで全くできなくなる子が多く、なぜこのようになるのだろうと疑問を持ちました。

理科では数学と同様の事の他に、実験の補助をさせていただきました。土沢中学の理科教師は一人です。実験の際は危険が伴うのでその見回りなど一人で忙しく、実験器具の整備もあり大変だと思いました。実験の前準備や予備実験を行い、その結果を報告し、生徒にはどのように実験させるか、どのような注意や工夫をすればよいかなどを先生と話し合いました。実験の

際、生徒は好奇心からか感情が高ぶり、先生の話の聞かず、私語をする場面が見受けられました。このような生徒は実験がうまくいかず失敗したり、やり方が全く分からなかったり、という事態に陥ってしまうようでした。この生徒たちから「~のようになっちゃったんだけどどうすればいいの」と尋ねられた際は教員ではないので勝手な指示を出すわけにもいかず、先生に何度も尋ねる形となってしまう、生徒には頼りない姿を見せてしまったと後悔しました。実験の際には如何にして生徒に話を聞かせるかが重要になるのだと学びました。また失敗の対応を用意しておく必要があるため、他の教科よりも負担が大きいなとも感じました。

その他の活動として、小テストの採点がありましたが、これは生徒がどこを苦手とし、どのように間違っているのかを把握する良い機会となりました。また、ワークの出来の確認、理科室の整理整頓・整備や維持などをしました。文化祭が近くなると生徒の自由研究の掲示や、訪れる保護者に対する対応についても考えなければなりません。

今回の一番の問題点は生徒がどこまで学んで、どこまで理解しているのかを把握できていないがために教え方に「制限」が生じることでした。高校、大学を経て、レベルの高い知識を身につけているために、その知識が仇となり詳しい内容まで話してしまい、混乱を招きかねないからです。他方、生徒同士の教えあいの中で、近いレベルならでは教え方に感心してしまいました。今の私に必要なのは、生徒にいかにして教えるかではなく、生徒の理解到達度や学習範囲を理解することや、理解させる方法、経験だと痛感しました。今回のボランティアは、自らの解決すべき課題が見出せたことが一番の成果だと思いました。

最後になりましたが、土沢中学校の皆さん、貴重な経験と時間をありがとうございました。また成長してから、お手伝いさせていただきたいので、その際はよろしくお願いたします。

2.4. 生徒に合わせた授業展開をする 難しさ

総合理学プログラム 2年 石川 航大

私は10月11日から12月20日までの計9回(金曜日9:50~12:00), 平塚市立土沢中学校で学校ボランティアの活動をさせていただきました。主な活動内容としては数学及び理科の授業に参加させていただき、練習問題や演習問題に生徒たちが取り組む際に分からないところなどを教えるというものでした。

今回の活動を通して感じたことは、教科書の内容をただそのまま教科書に沿って教えるだけでなく生徒たちの理解力や理解しやすい傾向を的確に読み取り、それに合わせて授業を展開していくことの大切さです。

今回の活動では2・3年生の数学の授業に参加させていただく機会が多かったのですが、ちょうど2学期はどちらの学年も範囲が証明の部分で、私も中学時代に苦戦した難しい範囲でした。証明の範囲は、まず証明を行うときに使う定義の証明から行い、その後その定義を使って問題を解いていくという形をとりますが、中学生にしてみれば同じ図形や同じような証明を何回も書くため少なからず退屈な授業です。またこの時期は受験勉強のために塾に行っている生徒も多く、クラスの中が大きく「もう分かっているという生徒」と「難しく理解しきれていないという生徒」の2パターンに分かれてしまっているのです。クラス全体としてあまり興味がないという雰囲気になってしまいがちです。土沢中学校の2,3年生も例外ではなく、全体的にあまり興味がないという雰囲気になっていました。そこで数学の先生は次のような工夫を行っていました。

- ① 教科書の問題を行うにしても補助線や求めるところを変え「もう分かっているという生徒」にも授業に参加させる。
- ② 全証明はできない生徒がまだ多いため証

明の途中が穴抜きになっているプリントを使って証明のパターンを覚えられるようにする。

- ③ 図などがあらかじめ印刷されていて、書き込むだけでいいというプリントを使う。

「もう分かっているという生徒」と「難しく理解しきれていないという生徒」のどちらも授業に参加するような工夫を行っていました。また生徒のことをよく見ていて難しい問題の時は「もう分かっているという生徒」に当てて答えさせ、簡単な問題のときは「難しく理解しきれていないという生徒」に当てるなどという細かい工夫も行って生徒を授業に参加させるようにしていました。

このような教える範囲とクラスの状態をしっかり把握した上で教科書の内容に工夫を加えたり、生徒の理解度を読み取ってプリントを作成したりということは経験が豊富だからできることなのかもしれません。しかし、このようなことができなければ、教科書通りにしか授業を進められないような詰まらない教師になってしまうと思います。正直、私もそうだったように勉強が好きな生徒はほとんどいないのが現状なのだと思います。ですが、そんな中でも授業に多くの工夫を取り入れて、担当する教科に少しでも関心を持ってもらいたいと感じて、大学などで勉強してみたいと思ってもらえるような授業を行えるような教師になりたいと、今回の活動を通して感じました。

このようなことを口で言うのは簡単なことですが、実際に行えるまでになるには多くの経験を積み、努力をしなければならないと思います。そして経験というのはこのようなボランティア活動だけではなく、日常の大学生活やアルバイトなどでも培われるものだと思います。また、今後は他の人の模擬授業なども見る機会が増え、そのようなときに良いと思った授業展開や工夫といったものはどんどん吸収し、自分が実際に生徒に教えることになった時に、自分が思うような授業が展開できるようになりたい

と思います。

25. 無限大の可能性を持った生徒

総合理学プログラム 2年 高島 葵

土沢中学校で週1回、理科の時間に学校ボランティアをやらせていただきました。実験中や生徒が問題を解いているときの補佐、理科室の掃除、プリントの印刷、提出物のチェックなどを行いました。週1回1時間という短い時間だったため、特定の生徒と多く接するという機会がなかったことが少し残念でした。

ボランティアを通して、先生という立場で生徒と接したいという気持ちが大きくなりました。生徒がプリントの問題を考えているとき、白紙で全く進んでいない子がいました。やる気もあまり感じられませんでした。しかし、声をかけて一緒に問題を考えてみると、最初はやりたくなさそうだった子が自分から問題に取り組んでいくではありませんか。ほとんどは私が教えないとできないものばかりでしたが、解説やヒントを聞いて問題を考えようとする姿勢が感じられました。問題がわかったときや考えているときの表情の変化は、つまらない表情からはかけ離れたものだったと思います。

また、生徒がパワーポイントで作成した資料を印刷したときがありました。内容を見てみると、そこは私の想像を超えたアイデアが詰まった素敵な資料でした。大きなテーマからそれぞれのグループが調べることを決め、まとめていくというよく聞く活動ですが、私が中学生のときにこんなにも色々なアイデアを出して、まとめることができたかなと、思い返してしまいました。まとめ方もとても個性的で、たくさんの色を使っていたり、写真をうまく使っていたりしました。中学生という時期だからこそできる発想とまとめ方にちょっとした嫉妬も感じたくらいです。

このような体験は、生徒が多くの可能性を秘めているということを実感させてくれました。このくらい出来てくれればいいな、中学生だからこのくらいが普通だろうという思いや先入観が私にはありませんでした。実際に私が先生になったときに、自分だけが突っ走ってしまい、生徒が全くついてこないということだけは避けたいと思ったからです。しかし、それは違うと思いました。私が生徒の限界を決めてしまっただけで生徒が成長するわけがありません。誰でもやればできます。その可能性を開いてあげるのが先生なのではないかと思いました。そして、何よりもいっばい可能性のある生徒の成長を近くで見たいと思いました。今までできなかったことができたときの生徒の笑顔や顔つきを見たいと思いました。

私は、先生になるにはまだまだ未熟なところばかりです。今回、土沢中学校の先生方と接してみてもそう感じました。わかりやすい指示や話し方はもちろん、信頼がおけるような堂々とした雰囲気やおおらかなところ…当たり前を感じるころも自分がやるとなると難しく、今から意識していかなければならないところだと思いました。くじけそうになることも多々あると思います。しかし、このボランティアで感じた、生徒と接したいという目標を持って進んでいきたいと思いました。

最後になりましたが、いつも笑顔で快く迎えてくださった土沢中学校の先生方ありがとうございました。いい環境で学べるボランティアができました。

秦野曾屋高等学校

2.6. 山積みの課題と可能性

情報科学科 3年 丸山彩恵子

秦野曾屋高校で1・2年生の数学・物理を担当させていただきました。曾屋塾という高校の補講に参加し、生徒の自主性に沿って支援を行なうという内容でした。

今回の活動は主に、“自分の未熟さ”と“自身の目標”について改めて考えさせられる時間となりました。

まず、“自分の未熟さ”についてです。数学の三角関数・ベクトルについて学習していない生徒に、物理で力の分解を理解することはかなり難しいものでした。先に数学の範囲を簡単にさらってから、質問されたところを答えるという方法を選びました。この方法では、数学に抵抗のある生徒には、分かり辛い、あるいはより物理を嫌いになってしまう状態を引き起こしかねませんでした。幸い、その時は「ああ、」と雰囲気だけでも伝わった様子でしたが、じっくりきていないのは明らかでした。もし、もっと物理の内容に詳しくなったら、数学をもっと簡単に出来たならと自分の知識・技術の足らなさを痛感しました。しかし、これが分かれば新たな可能性が広がるという大きなヒントも同時に得ることが出来ました。

次に、“自分の目標”についてです。「今日授業が分かったんです。余裕ってほどではなかったですけど。」この言葉が心底嬉しかったです。一見当たり前のことのように思うこの言葉は、この日まで一緒に勉強していなければ何の感動も無いただの言葉に過ぎませんでした。しかし、最初は落ち着いて問題に向かうことが難しかった生徒が、問題の意味を理解し、求める筋道を見つけて答えが出せるようになるという画期的

な成長でした。紛れもなく、本人の努力が実を結んだ瞬間でした。この瞬間に立ち会えたことが、自分の目標を見つめ直す大きなきっかけになりました。「笑顔や、分かったを傍で支えた」これが教師になれたときの目標だということを確認させられました。

今回まで、2年間の学校ボランティアを通じて中学生・高校生と関わらせていただきました。授業形態こそ違うものの、一つとして無意味だったものなどありません。「どんな先生が関わりやすいのか」「先生は何を求められるのか」「どんな事で笑ってくれるのか」「どんな言い回しなら伝わるのか」普通に大学生活を送っているだけでは知る事や考えることは無かったかもしれないことを学べる場でした。緊張しやすい性格で、初めこそコミュニケーションをとることに躓いていましたが、徐々に“慣れ”を習得する事ができました。これこそ、実際に学校現場でしか補うことの出来ない能力だと思います。課題を見つけ、克服し、また新たな課題を発見する。自分の教師として欠落している部分を強引にでも見つめ直し補える、また自分の目標がいつでも感じられる環境が身近にあることに感謝します。

羽沢小学校・明治小学校

27. 子どもたちの魅力・授業の工夫

国際経営学科 4年 佐藤 彩香

私は、多くの現場経験を積むためにボランティア活動を行っている。2年の冬から横浜市立羽沢小学校に行き始め、4年の夏から藤沢市立明治小学校にて勉強が苦手な子どもを中心にサポートを行ってきた。

この体験を通して、自分が小学生のときと実際に教師の目線に立ったときでは教師のイメージがとても変わった。そして、多くの子どもたちと接すること、先生たちの授業を見て勉強することで教育実習もスムーズに進んだのだと思う。この二点がボランティアをする上の魅力だと感じている。

まず、子どもと楽しく関わることである。「先生来てくれたの!」といって嬉しそうにかっつけてくれる子どもの姿を見ると、今日もがんばろうという気持ちになれる。また、「勉強がわかった!」という声も聞けるのがボランティアのやりがいでもある。休み時間には一緒に全力で鬼ごっこするなど子どもの気持ちに戻って触れ合っていると、子どもの考えていることが少しずつわかるようになってきたと思う。この笑顔に先生たちはやりがいを感じているのだと思った。

子どもと接して重要だと感じたことは、子どもたちに自己肯定感をつけさせるということである。授業サポートしているときに、正解していたり、工夫がされていたりしたらすぐ褒めて認める。子どもが「自分はやればできる人なんだ」という自信を積み重ねていくと、徐々に目がキラキラとしていき、その子が授業中に挙手するようになった。

次に、ボランティアでは先生たちの授業を見て学ぶことができる。印象に残った授業は、4年生の算数で「いろいろなはかり方の復習」をする授業であった。はかり方にも様々あり、例えば鉛筆同士の長さをはかる場合だったら、①単純に鉛筆を隣同士にくっつけてはかる②消しゴム1個分Aの鉛筆の方が長いというようにはかる③定規ではかる、というような様々なはかり方があり、これを子どもの声から出させてクラス全員で様々なものはかり方を発見しているような授業であった。この回は長さだけでなく、重さ、水のかさと進めていき、最終的に次時の内容である広さをどうはかっていけばいいか考えさせる授業に展開していく。

小学校と中学・高校での指導面で異なる点は、子どもの声を何よりも大事にする部分である。中学校では社会科で教育実習をさせていただいたが、内容は中学生にとって新しい知識が多く、資料の読み取り以外は自分が説明してしまうことが多かった。しかし、同じ社会科でも小学校の場合は子どもと共に学ぶ姿勢がよりいっそう重視されるように感じた。新しい知識を教えるとき、先生がそのまま教えるのではなく、子どもが気になると感じた疑問は先生がそのまま答えを言うてしまうのではなく、発問としてグループ同士で考えさせてみたり、次時の課題としてつなげたり、宿題として調べさせたり、と様々な方法をとっていた。子どもの発言を大切にすると、指導方法も変わり、独特の難しさがあると感じた。しかし、子どもが主体的になって授業に取り組んでいるときの目は輝いており、私も立派な授業ができる教師になりたいと強く感じた。

ボランティアをしたことのない学生は、ぜひ機会があればボランティアをしてほしいと思う。現場で経験を積むのと積まないのでは、教育実習や将来の教師生活に必ず何十倍もの差が出ると思う。

毎週毎週楽しくボランティアさせていただいたので、来年度から、もう今の小学校に通えな

なくなってしまうことが残念である。この経験を活かし、立派な教師を目指して頑張っていきたい。ありがとうございました。

土屋小学校・土沢中学校

28. 教師の立場から見た学校

情報科学科 4年 須田 遼

平塚市立土屋小学校、平塚市立土沢中学校、この2校で学校ボランティアに参加しました。土屋小学校は毎週水曜日の午後に活動を行い、まずは給食を児童たちと一緒に食べました。学年は1・2・3年生が主でした。そのあとは掃除を手伝い、昼休み以降の活動は日によって様々でした。図書館の蔵書の整理や1年生の音楽の授業見学まで様々なことに携わってきました。

一番印象に残っているのは、りんどう祭です。りんどう祭では4年生の教室で算数教室を担当しました。そこに来てくれた子達に魔法陣やマッチ棒のパズルを教えてあげました。その日が一番生徒たちとふれあうことができ、問題が解けたときとても喜んでいました。

今回は授業の補助に入ることは少なかったですが、その少ない経験の中で印象に残っているのは、5年生の道徳の授業を見学した時です。内容はいじめについて1学期にクラス目標を決めて、その目標をどれだけ達成できたかを作文にして一人ひとり読み上げるもので、その内容をひとつにまとめて金曜日の集会で発表するために準備をするものでした。そこではクラス全員がちゃんと発表の準備をしていて、ちゃんと全員が意見を言っていました。自分が小学生の時にはクラスに2,3人必ず準備をしなくて発表をサボってしまう子がいました。でも土屋小では全員が発表をし、子供同士で意見交換をしていました。先生がちゃんとクラスの生徒全員を上手にまとめることができている、このことにすごく感動しました。

土屋小では、植木の剪定や校門の修理等の雑

務の他、祭りや集会など、学校全体で行う行事が多数あり、その準備や片付けはほとんどが、職員が手間暇かけてやっているそうです。それを聞いて思ったことは教師の仕事は直接的な教育活動だけではないということでした。自分は教師の仕事に関して、授業や特別活動、生徒指導などを考えていましたが、実際の仕事には雑用などもたくさん含まれていました。自分が小学校のときは土屋小とは違い、もっと大きな学校で先生以外の用務員や事務員の人たちも大勢いました。だから教師の仕事がそこまで幅広いものだとは思いませんでした。それがりんどろ祭のときに集まった地域の人たちを見て、初めて学校は教師だけで支えられているものではないことがわかりました。

土沢中学校では毎週月曜日の午後にボランティアに参加しました。中学校のボランティアは小学校とはまた違い、数学の時間は授業の補助、理科の時間は授業補助の他にも備品の整備や理科室の片付け、予備実験なども行いました。

特に印象に残っているのは、中間テスト前のプリント演習のときでした。そのとき自分はプリントの問題について席の後ろの子達を特に教えていたのですが、その授業の最後に、「わかりやすかった。」「教えてくれてありがとう。」などと言われました。これは多分教師になってからは言われない学生ボランティアの立場だからこそ聞けた言葉なのだと思います。中学校教師は小学校より専門的な内容を教え、学校生活より勉強や部活動などを優先する子もいるので、このようなことは教師に対してはあまり言わないと思います。

今回このような客観的な立場から学校をながめて、教師としてどのようなことを考えて生徒と接すればいいのかを間近に見て、短い期間で様々な経験をすることができ、とても貴重な時間を過ごせたと思います。

土沢中学校・秦野曾屋高等学校

29. 確かな「理解と伝え方」

生物科学科 科目等履修生 小椋 光

私は4月から引き続き、土沢中学校と秦野曾屋高等学校で学校ボランティアをさせていただきました。秦野曾屋高等学校の校内学習塾「曾屋塾」では、講師として学習支援をさせていただきました。曾屋塾は有志の生徒が自主的に入塾し、放課後の時間を使い、講師に授業等でわからなかったことを質問し、生徒自身の自学・自習のきっかけを与える場です。私はこの曾屋塾で、基本的には毎週水曜日の15:45～16:45の1時間を生物科学科の西田 紘章さんと2人で担当しました。生徒の数は1年生5名、2年生2名の計7名で、主に数学ⅠA・ⅡBの指導を行いました。

今回の学校ボランティアでは、確かな学習理解をするためには、生徒自身が問題文を把握し、問題全体をイメージする力が必要であるということがわかりました。また、我々講師が生徒に確実に伝えるためには、抽象的な言葉を使わないことが重要であるということがわかりました。

まず、二次関数の式を求める問題を指導した際、生徒は自分が解いたことがある問題と同様の解法で全ての問題を解こうとしていました。このように生徒は同様の解法で解答しようとするため、数値が変わっただけの問題しか解くことができず、同じ二次関数の式を答える問題でも、問題文が違う形式で書かれているだけでつまづいてしまい、解答できない生徒が多数見られました。このことから、生徒は機械的に問題を解いているだけで、しっかりと問題全体を読んでもおらず、イメージできていないということがわかりました。多くの二次関数の問題は、条

件として座標が示されており、求める座標を導く助けになるよう、ヒントが提示されています。このヒントから、どのようなグラフになるのかということ把握することが問題を解く上で重要なポイントです。

実際に曾屋高校の定期テストの問題では、図やグラフが書いてある問題もありますが、全ての問題に図やグラフが書いてあるわけではありませんでした。文章題の場合、文章中から必要な情報を得て、その情報から図やグラフを生徒自身の頭でイメージすることが必要となります。しかし、生徒は問題の意味をきちんと理解せず、どのようなグラフになるのかを把握していないので、問題を解くことができません。このことから、問題全体を把握できていないと、確かな理解には通じないということがわかりました。そこで、問題全体をイメージする力をつけるために、問題文の解答に必要な文や要点をチェックさせました。そこから、問題文の意味を理解させ、図やグラフを書いて全体を把握させる指導を行いました。イメージができると生徒たちも問題の意図を理解し、問題を解くことができるようになりました。

また、三元一次方程式の問題を指導した際、問題を解く過程で連立方程式の解法を説明しました。そのとき、私は「一つの文字の数値を求めたら、その数値を3つの式の中で一番簡単な式に代入します。」という説明をしました。その説明を聞いた生徒の1人が「簡単な式というのはどういう式ですか。」という質問をしました。生徒の発言を受け、私の感覚や認識の中だけにしかない「簡単な式」という言葉を使ってしまい、それでは生徒には伝わらないことに気づかされました。このことから、自分の中で勝手に決めてしまった言葉ではなく、具体的に説明しなければ相手には伝わらないということがわかりました。また、具体的に説明することが、生徒にとって親切的な伝え方であり、確かな理解にもつながるということがわかりました。

曾屋塾を通し、現場で教えてみると生徒たち

の質問や発言から気づかされることが多数あるということがわかりました。また、曾屋塾で勉強してよかったと言ってくれる生徒もいて、理解してくれる喜びを感じることもできました。これらの経験を活かしてこれからも生徒とともに成長していきたいと思います。

30. まるかいてちよん, まるかいてちよん。

～絵描き歌を使用した読解力トレーニング～

生物科学科 科目等履修生 西田 紘章

私は2013年4月から継続して秦野曾屋高等学校において、曾屋塾の講師として活動を行って来ました。曾屋塾の主な活動としては、神奈川大学・生物科学科の小椋 光さんと共に講師を担当し、高校1年生と2年生に対して数学I, A, II, Bの指導を行って来ました。

今回、秦野曾屋高校でのボランティアを通し、生徒と直にふれあうことができました。そして、この曾屋塾の活動で、問題文を正しく読めていないことから解答できていない生徒が見られました。

我々が担当する曾屋塾には1年生が5名、2年生が2名参加しており、全ての生徒が4月から継続して曾屋塾に通塾しています。この曾屋塾では、曾屋高校からの学習指示は一切無く、講師たちで学習することを判断し、決定します。

我々が問題を作る際に注意していることは、生徒一人ひとりの学力レベルに合わせた問題を作成するという事です。4月から継続して生徒を見ており、生徒個人個人の学力レベルがわかってきました。そのため、原理や公式を答えさせるような基礎的な問題から、応用的な問題まで幅広い問題を用意しました。そして、学力レベルが低い生徒には基礎的な問題を解かせることで公式や解法等の定着を狙い、学力レベルの高い生徒には応用問題を解かせることで様々

な角度から問題を理解してもらいました。

しかし、生徒全体を通して言えることは、文章題での正答率どころか解答率までもが著しく落ちるということです。二次関数やベクトルなどの問題において、問題文と図やグラフが掲載されている問題に関しては、おおよその正答率がありました。ただ、同様の問題でも図やグラフがない場合、生徒のほとんどが正答はおろか、解答も出来ていませんでした。その原因として考えられることは、生徒たちは文章のみで表された図やグラフを、頭のなかで明確に想像できていないことがあげられます。

二次関数の座標を求める問題でこの課題を考えます。問題文と同時にグラフが掲載されている場合では、掲載されているグラフから求めるべき座標がどの象限にあるのかおおよその目星をつけて解答することが可能です。しかし、グラフが掲載されておらず問題文のみの場合だと、グラフから座標の目星をつけることが出来ないどころか、そのグラフが上向きであるか下向きであるかもわかりません。そのため、まずは自分たちでグラフを作成しなくてはなりません。ただ、多くの生徒はグラフを作成する作業を避け、解答しようとするため不具合やケアレスミスが生じてしまうのです。更に、問題文が複雑化し、明確に何を解答するか問題文に書いていない場合、解答するもの自体がわからなくなっています。

このような課題を解決するため、我々はまず問題文を読み取る力の充実化を図りました。その際、我々は絵描き歌を使用し、トレーニングを行ってきました。絵描き歌には、描くべき絵が「歌詞」で表現されています。まず、生徒に絵描き歌のタイトルを告げずに、歌詞だけを伝えて絵を描いてもらおうと、当然ながら生徒は何を描いて良いかわからないため、でたらめな絵を描いてしまいます。そうした後、生徒に絵描き歌の「タイトル」を伝え、頭のなかに描く絵を想像させ、漠然と描くのではなく、その歌詞が絵の「どの部分」を表しているのか考えなが

ら描いてもらいました。すると、生徒は歌詞の一文一文を丁寧に読み込み、歌詞の意味を考えながら描くことをしていました。これは、文章題の解答の仕方と同様の作業であり、文章題の要点を読み取ることへと繋がると考えます。

最後に、このような貴重な経験を与えてくださった秦野曾屋高校の先生方、鈴木 そよ子先生、日野 晶也先生に感謝いたします。

土屋小学校・土沢中学校・ 秦野曾屋高等学校

3.1. 大学生ボランティアとしての立場

情報科学科 4年 栗原 史帆

私は学校ボランティアで小中高の3つの学校を訪問しました。各学校でのボランティア内容、時間、回数等は以下のとおりです。

小学校…給食、清掃、昼休み、

5校時目(校務作業、授業補助など)
(毎週金曜 12:30～14:30 8回)

中学校…放課後学習会指導(数学)

(毎週木曜 15:00～16:00 6回)

高校……曾屋塾(放課後学習)指導(数学)

(毎週月曜 15:45～16:45 6回)

上記の活動内容にもある通り、私の参加したボランティアのほとんどの時間が授業時間ではなく、休み時間や放課後などの時間であり、授業時間に比べて、教師主体の時間ではないこと、直接児童・生徒と話す時間が多い時間であることを感じました。その中で感じた、大学生ボランティアとしての児童・生徒との関わり方についてまとめたいと思います。

まず、大学生ボランティアをしている学生は教職課程を履修しており、将来的には教員や児童・生徒に携わる仕事をしようと考えている場合が多く、自分の今後活かすための経験としてボランティアに参加しているという学生が多くいます。少なくとも私は教職課程を履修し、将来的に教員になりたいと考え、そのための経験としてこのボランティアをはじめました。したがって、多くの大学生ボランティアがボランティアをしているときの立場は、児童・生徒側ではなく、将来的に目指している教師側であると思っていました。ですが実際には、教師側でも児童・生徒側でもない大学生としての立場で

あると感じることが多くありました。

そこで、ボランティア中に感じた教師側の立場と大学生側の立場を表1にまとめてみました。

表1

	教師側の立場	大学生側の立場
小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中の指導 ・移動などの誘導 ・授業・授業準備 	<ul style="list-style-type: none"> ・昼休みに一緒に遊ぶ。(鬼ごっこ、絵本など)
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導 ・進路の話 	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の話 ・出身高校の話 ・学習会後の雑談
高校	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導 ・テストの話 ・進路の話 	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の話 ・テストの話 ・学習会後の雑談

このように、学習会や授業時間など、決められた時間の中では教師側の役割をしていても、それ以外の時間では大学生としての立場が多くなりました。もちろん実際に大学生なので致し方ないことではあるのですが、この時間には、私の立場に少し悩んで話かけてくる児童・生徒がいることや、話しかけられた内容に大学生側の対応をしてもいいのかと悩むこともありました。しかし、大学生側の対応は大学生ボランティアでなければならないという点もあると感じることができました。たとえば、高校ボランティアにおいて大学生という立場でした進路の話では、大学へ進学希望の生徒と実際の大学について話すことができました。少しではありましたが進路意識を高めることができ、これは大学生がボランティアをしていたからこそその結果だと感じました。(進路の話については教師側の立場としても表に加えてありますが、教師側の立場よりも自分の経験を中心とした話を大学生側の立場としました。)

もちろん、実際の学校や先生方がすぐ横にいる環境に参加させてもらい、教師側の立場を知ることが多くできました。したがって、当初考

えていた教師側の立場がわかるということだけでなく大学生という立場でも児童・生徒と関わることができました。このような貴重な経験をさせていただいた各学校の皆様に感謝いたします。